



The Japan Association for Language Education and Technology

外国語教育メディア学会

NEWSLETTER No. 100

March 2022

発行 外国語教育メディア学会 (LET) (会長：森田 彰)

事務局 〒193-0985 東京都八王子市館町815-1  
拓殖大学外国語学部 見上晃研究室内

HP <http://www.j-let.org/>

## 巻頭言

### ご挨拶

会長 森田 彰 (早稲田大学)

度重なるウィルスの変異により、新型コロナウイルス感染症の流行は世界的に見て、収まったと言える状況にはありません。誠に残念なことです。その不透明な現状の中で、最前線の医療従事者の皆さん、社会の基幹を担うお仕事をされている皆さんのご努力には、改めて最大限の敬意を表させていただきます。

もちろん、教育現場でも、皆さんが対面、ハイフレックス、オンライン、オンデマンドと違った形態の授業に対応し、教育の質、レベルが必死に保たれています。苦境の中、新たな環境でのイノベーションの可能性を探り、効果的教育法の実験と実践が行われ、成果が報告されてもいます。この多難な年に、Newsletter 100号が発行される運びとなりました。LETは、前身の語学ラボラトリー学会 (LLA) から60年を経、新たな歴史を刻むことになりました。誠に慶賀に堪えないことで、これは会員の皆さんとともに、素直に喜びたいことです。

コロナ禍の中での学会活動にも、確かに多くのハードルがありました。しかし、そこでもテクノロジーの活用によってLETらしい活動を行い、研究が進んだ部分も多くありました。それらの成果は、オンラインで行われた各支部の研究大会、そして同じくオンラインで開催された第60回全国研究大会、さらに機関誌 *Language Education & Technology* で発表されました。特に、九州・沖縄支部の皆さんの3年に亘るご努力によって催された全国研究大会については、植田正暢実行委員長 (北九州市立大学) より本号で詳しいご報告がいただけます。私自身も、基調講演、全体・公募シンポジウム、研究発表・実践報告、賛助会員プレゼンテーション、更に賛助会員も交えた皆さんとのバーチャル交流会から多くを学ぶことができました。大会テーマ「外国語教育におけるユニバーサルデザインの現状とニーズ」は、今の時代に最も適切なテーマであったと思います。研究大会全体を通じて、新たな発見、新たな感動を多くかつ楽しく経験することができ、嬉しく思っています。

全国研究大会後に行われました理事会・総会において、もう一期会長職を務めるよう、仰

### 目次

巻頭言 .....	1
追悼 .....	3
全国研究大会を終えて .....	5
2021年度外国語教育メディア学会学会賞受賞者寄稿 .....	7
第60回 (2021年度) 全国研究大会報告 .....	8
2020年度本部事業報告・決算報告 .....	26
2021年度本部事業計画・予算 .....	28

せつかりました。After COVID-19 の世界がいつ訪れるのか、このまま **coexisting** となるのか、いずれにせよこの数年は、私たちの学会の真価が問われる数年となるでしょう。執行部では、状況に流されることなく、会員の皆さんの業績の発表、情報交換の機会を確保し、発展させるべく様々な方策を考え、各支部執行部の皆さんのご助言とご協力をいただきながら、全国レベルでの活動を充実させていきたいと思っています。具体的には、機関誌の充実、全国研究大会の参加システムの効率化、そして全ての会員の皆さんのご意見やご要望を日常的にお寄せいただくための方策などを考えております。

と言いましても、LET の活動の基本は、地域の実情やニーズに合わせた支部レベルの研究活動です。本部は、支部執行部の皆さんと手を携えて、各支部での研究活動の情報をより円滑に全国の会員へお届けできるよう、努力して参ります。改めまして、どうぞ宜しくお願いいたします。

## 故池浦貞彦先生を偲ぶ

LET 名誉会長 木下 正義

2021年9月6日(月)、島谷浩先生(熊本大学)より池浦貞彦先生が8月25日にご逝去された訃報が届きました。享年91歳でした。一番の恩師で畏友を失ったことで、その日は悲嘆にくれた一日となりました。

池浦先生(福岡教育大学)との出会いは、1971年にELEC主催「米国英語教師夏季研修」に参加した時でした。そこで邂逅した先生のご推薦を得て、1972年第4回LLA九州支部研究大会(於:佐賀大学附属中学校)のパネル討議「外国語教育でLLをどのように利用したらよいか」で池浦先生の見事な司会で、パネリストとしての実践報告がLLAでの私のデビューとなりました。

1964年にLLA第4回全国研究大会(於:同志社大学)に参加された後、泉マス子先生(西南学院大学)・板倉武子先生(福岡女学院大学)と「3I会」を発足されて、LLに関する毎週1回の研究会を実施されました。

1970年にはLLA九州支部が発足しました。第3代LLA支部長(1993-1998)に池浦先生、副支部部長に泉・板倉両先生で支部運営と実践活動を執り行なわれました。1994年から支部研究大会の前日に、会員・非会員を問わず30~40名参加のワークショップ「支部講習会」を「3I会」が提案された実績は高い評価を得ました。1993年度より池浦・泉両先生の発案で、「研究推進委員会」が発足し、第1期~第5期まで各会期のテーマに沿って研究し、全国研究大会や国際大会で口頭発表及び研究紀要で、その実績を報告しました。この「研究推進委員会」は、後に「支部研究プロジェクト」に改名されました。1997年8月FLEAT III(Univ. of Victoria, Canada)で、“An Analysis of Listening Comprehension Abilities of Japanese and Korean High School Students”のテーマで口頭発表をして、大会終了後には池浦・泉両先生と共に、研究会メンバーによるカナディアン・ロッキーでの小旅行は楽しい思い出に残るアルバムとなりました。

2000年よりLLAからLET(外国語教育メディア学会)に改名されましたが、名称変更の件で理事会では河野守夫先生(神戸市外国語大学)の司会のもと、夜食を食べながら激論したことを追憶しています。尚、2002年の「LLA九州支部」から「LET九州・沖縄支部」への名称変更も、池浦先生の発案であったことを付言いたします。2008年度LET第48回全国研究大会は“WorldCALL 2008”と共催で、私が第10代LET会長として実行委員長を務めました。池浦先生には顧問に就任して頂き、適切な助言・激励の言葉を拝しました。そのWorldCALL 2008(8月4日~8日、於:福岡国際会議場・福岡大学・西南学院大学)は4支部、世界33ヶ国から延べ約1300名の参加があり、大会は大成功裡に終了しました。

第50回LET全国研究大会(2010年8月、於:横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校)では、LETでの長年の功績と実績が評価され、LET功労者として池浦先生と私が表彰されたことは名誉なことでもあり、池浦先生への深謝の念を禁じえない昨今です。

彼岸の里での再会と歓談を祈念いたします。



池浦先生（右）と筆者

## 全国研究大会を終えて

大会実行委員長 植田 正暢（北九州市立大学）

第60回全国研究大会が2021年8月13日から29日（うち8月20日から22日にライブ配信）の日程で開催されました。まずは多くの方にご参加いただけたことに感謝申し上げます。また基調講演でご登壇くださった竹田契一先生（大阪医科薬科大学）、飯島睦美先生（群馬大学）、および全体シンポジウムでお話くださった雪丸尚美先生（北九州市立大学）、村上加代子先生（甲南女子大学）、佐藤良子先生（麗澤大学）にはそれぞれの視点から大会テーマである「外国語教育におけるユニバーサルデザインの現状とニーズ」についてご講演いただきました。新型コロナウイルス感染症の影響で開催が1年延期になりましたが、快く講師を引き受けてくださったこと厚くお礼申し上げます。また紙幅の関係で個別にお名前を出すことはできませんが、ワークショップの講師のみなさまにもオンラインという環境の中で工夫を凝らした講座をご担当いただき、感謝いたします。

ふりかえってみると、大会の中身から運営に至るまで非常に多くの方に支えられた大会でした。中身について述べると、今大会テーマについて大会実行委員会の中には専門家がいまませんでした。大会実行委員会でブレイン・ストーミング的に話し合いをする中で、インクルーシブ教育が課題となっている昨今、あまりにも自分たちが現状を十分に把握していないことを認識したことが出発点となっています。大会実行委員会の構成員が学びたいことをそのまま大会テーマにしました。したがって、馴染みのないテーマについて学びながら今大会のプログラムを練り上げていきました。2019年に英語教育ユニバーサル研究会が設立されましたが、その設立記念講演会にお邪魔させていただき、一から学ぶ機会をいただきました。基調講演から全体シンポジウムまでの話し全体がバランスのとれたものだったという感想をいただきましたが、全体をどのような構成にするのがいいのかは飯島先生からご助言をいただき、助けていただきながら作り上げてきました。

運営については異例づくしでした。今大会は当初2020年9月に開催する予定でスケジュールが組まれていました。例年、8月上旬に開催されてきましたが、オリンピックと重なることから移動や宿泊施設の混雑が予想されたため9月に時期を変更して行うことが決まりました。しかし新型コロナウイルス感染症がまん延し、大会が1年延期され、オンラインでの開催となりました。オンラインで開催するために参加登録から大会運営のためのシステムの構築が必要となり、オンライン開催が決定した直後は設計図をどのように描き、何から手を付けたらよいか途方に暮れました。幸い、LET本部のシステムを管理しているアゼット様に参加登録システムを構築していただき、また大会ホームページを設計していただきました。アゼットの岡部守良様にはこちらの要望を丁寧に聞いていただき、システムとして具現化いただきました。

オンラインで学会を開催するには、対面で行うよりも事前の準備を入念に行う必要があることを思い知らされました。対面であれば、会場に人さえいればどうにかなるところがありますが、オンラインの場合、Zoomミーティングを管理する側にしても、研究発表する人にしても、発表を聞く人にしても、最後は自分で機器を操作し、大会に参加する必要があるため、他人に頼らなくてもできるようにするためにはどうしたらよいかという部分に苦しみました。Zoomミーティングの開催にあたっては北九州市立大学および福岡女子大学の学生アルバイトのみなさんにもお手伝いいただきました。1つのミーティング

にホストから司会者まで複数名が関わる体制をとりました。当初、ミーティングのホストを担当するアルバイトの皆さんには大学に集まっただき、大会実行委員の目があるところでコンピュータを操作してもらうことで、トラブルが起こった場合にすぐに対応できるように計画していましたが、会期がちょうど新型コロナウイルス感染症の第5波が押し寄せ始めた時期に当たり、大学構内への入構制限が厳しくなったことから、アルバイトの学生には自宅から操作してもらう必要が出てきました。そのため事前打ち合わせを重ねながら大会本番に臨みました。ライブ配信期間中は5台あるコンピュータの前に陣取り、各ミーティングの進行状況を監視していましたが、どのミーティングも大きなトラブルなく、スムーズにプログラムが進行するのを見届けることができました。

ここまで私の苦労話のような報告になってしまいましたので、最後に別の視点から大会について総括したいと思います。「LET九州・沖縄支部だより」第76号(2021年11月10日発行)で、この大会の報告記事を執筆し、そのなかで会員の交流を目的に利用したoViceについて述べる中でも触れましたが、オンライン学会を、対面で行う学会の代替として捉えてしまうとネガティブな面が目立ってしまうと思います。しかし、対面とは異なるオンラインのよさに目を向けると新たな可能性があるのではないかと感じました。たとえば、ポスター発表は対面で研究発表を行う場合にはA0用紙がコミュニケーションを促すよい媒体となりますが、それをそのままオンラインの世界に持ってきてもそのよさは活かされないことでしょう。しかし、oViceの中で試みたようにオンデマンド・ビデオをポスターの代わりに「展示」し、ビデオを介してアバターを使用して発表者と聞き手がコミュニケーションを図ることができれば、対面とは異なる「ポスター」発表が実現できると思います。紙は2次元の世界でしか情報を伝えることはできませんが、ビデオは3次元的に情報を発信することが可能です。今後どのような方向に学会が向かっていくのかは不透明ですが、LETならではの大会が今後も計画されることを祈りつつ本稿を閉じたいと思います。

## 2021 年度外国語教育メディア学会学会賞受賞者寄稿

対象業績（論文賞）：日本の高等学校での活用を想定したペア型スピーキングテストの開発

受賞者：山本大貴（信州大学）、近藤 暁子（兵庫教育大学）、鳴海 智之（兵庫教育大学）、  
多田 ウェンディ（兵庫教育大学）、吉田 達弘（兵庫教育大学）

### 論文賞を受賞して

山本 大貴（LET 中部支部、信州大学）

この度、栄誉ある LET 論文賞を頂戴し、誠に光栄に存じます。歴代の受賞者のお名前を拝見しますと、著名な先生方ばかりで、大変恐縮しております。

まず、査読者の先生方にお礼を申し上げます。内容の大幅な改善につながるご助言から、誤植のご指摘まで、多くの貴重なコメントを頂戴しました。ここまで丁寧にご指導いただけるとは想定しておらず、大変感激致しました。聡明でご親切な査読者に恵まれなければ、賞をいただけるような論文に仕上げることができませんでした。私の感謝の気持ちが、この Newsletter を通じて査読者の先生方に伝わることを願っております。

また、機関誌編集委員会の先生方にも大変お世話になりました。特に、機関誌事務局の小倉雅明先生には、論文の投稿から掲載に至るまで、とても親身になってご対応いただきました。その他、本論文をご推薦くださった先生方など、多くの方のお力添えを得て受賞に至ったものと理解しております。心より感謝申し上げます。今後も研鑽を続け、いつか LET に恩返ししたいと考えています。

受賞対象となりました論文は、私が 2020 年 3 月までお世話になった兵庫教育大学で実施された、文部科学省委託事業「中学校・高等学校における英語教育の抜本的改善のための指導方法等に関する実証研究」の成果の一部です。約 3 年半の間、共著者である吉田達弘先生、近藤暁子先生、多田ウェンディ先生、鳴海智之先生とともに、研究協力校の教員や生徒の皆様のご協力を得ながら、懸命に研究に取り組みました。楽しいこともたくさんあった反面、苦労も多くありました。特に、「話すこと」の評価方法には頭を悩ませました。たとえば、ある高校にインタビューテストを実施いただいたところ、3 回分もの授業を費やすことになってしまいました。そこで、生徒の解答を録音し、それを授業外で採点する形式を試しましたが、その結果、ただでさえご多忙なある高校の先生に、莫大なご負担をおかけする事態となりました。これらの反省を活かし、信頼性・妥当性はもちろん、実用性にも最大限配慮した「話すこと」の評価方法を皆で必死に考え、試行錯誤しながら完成させたのが、本論文でご提案した「ペア型スピーキングテスト」となります。皆様に自信を持っておすすめするにはさらなる改善や効果検証が必要だと認識しておりますが、本論文が、学校現場で無理なく実施できる実用性の高いスピーキングテストの作成方法について考えるきっかけになれば嬉しいです。

最後に、共著者の先生方に感謝の言葉を述べさせてください。先生方は、着任時には何の実績もなく、今以上に実力不足だった私を、辛抱強く育ててくださいました。今思えば恥ずかしくなるような要領の得ない言動や、大きな失敗をたくさんしたにも関わらず、いつも大変親切にご指導くださいました。また、未熟な私を信頼して、重要な役割を任せてくださることも多くありました。おかげで、大きく成長することができました。いつか先生方に、「我慢して育ててやってよかった」と思っていただけのように、引き続き努力します。本当にありがとうございました。

## 第 60 回（2021 年度）全国研究大会報告

外国語教育メディア学会・第 60 回全国研究大会は 2021 年 8 月 20 日から 22 日まで、オンラインにて開催されました。

### 概要：

開催日	2021 年 8 月 20 日（金）－22 日（日） 【オンデマンド配信期間 8 月 13 日（金）－29 日（日）】
会場	オンライン（オンデマンド配信型＋ライブ配信型）
参加者数	382 名 ワークショップ参加者数 延べ 194 人 発表件数 公募シンポジウム 4 件（ライブ配信 3 件、オンデマンド配信 1 件） 研究発表・実践報告 55 件（ライブ配信 25 件、オンデマンド配信 30 件） 賛助会員プレゼンテーション 7 件
主催	外国語教育メディア学会（LET）
会長	森田 彰
大会会長	長 加奈子
後援	文部科学省・福岡県教育委員会・北九州市教育委員会
実施内容	下記の通り

8 月 13 日（金）－29 日（日）

### オンデマンド配信型発表

#### 基調講演 1：

LD/Dyslexia の児童生徒への英語教育について

竹田 契一（大阪医科薬科大学 LD センター顧問・大阪教育大学名誉教授）

#### 基調講演 2：

ユニバーサルデザイン英語教育： 知ることで気付き、気付くことで始まる手立て

飯島 睦美（群馬大学）

### 全体シンポジウム

外国語教育におけるユニバーサルデザインの現状とニーズ

日本の英語教育におけるユニバーサルデザイン：現状と課題

雪丸 尚美（北九州市立大学）

英語の読み書きに困難のある中学生への指導

村上 加代子（甲南女子大学）

ユニバーサルデザインの視点を持ったテストの作成

佐藤 良子（麗澤大学）

### 公募シンポジウム、研究発表・実践報告、賛助会員プレゼンテーション

8月20日(金): 第1日

---

ワークショップ

---

Room 1

(15:00-16:30)

3 ラウンド S&W

坂本 彰男 (福岡女学院中学校・高等学校)

(17:00-18:30)

日本の中高英語授業に欠けている「英語を体得する」授業

田中 十督 (西南学院中学校・高等学校)

Room 2

(13:00-14:30)

学習が苦手な生徒も楽しめる! デジタル教科書を使った英語学習

板垣 静香 (関西学院大学)

(15:00-16:30)

主体的に学びに向かう言語学習者を育て、支えるメディアとアプリケーション

中村 純一 (佐賀龍谷学園龍谷中学校・高等学校)

(17:00-18:30)

小学校英語教育における CLIL 実践

山野 有紀 (宇都宮大学)

Room 3

(13:00-14:30)

英語教師のための実践研究法ワークショップ

藤田 卓郎 (福井工業高等専門学校)

(15:00-16:30)

Rを使った統計検定超入門

内田 諭 (九州大学)

(17:00-18:30)

Informative Data Presentation Using Graphics

Jenifer Larson-Hall (The University of Kitakyushu)

8月21日(土): 第2日

---

開会行事

---

司会: 田上 優子 (大会事務局長、福岡女子大学)

挨拶: 森田 彰 (外国語教育メディア学会会長、早稲田大学)

長 加奈子 (大会会長、外国語教育メディア学会九州・沖縄支部長、福岡大学)

基調講演 1 Q&A セッション

---

LD/Dyslexia の児童生徒への英語教育について

竹田 契一 (大阪医科薬科大学 LD センター顧問・大阪教育大学名誉教授)

本基調講演は、読み書き障害と英語教育との関係について、まず「読み書き障害」とは何か、どのようなことが出来て、どのようなことが苦手なのかについてお話いただいた。読み書き障害を持つ児童の再現ビデオをご提示いただき、読み書きの土台となる文字から音への変換システムに問題があることを分かりやすくご説明いただいた。また、英語の文字と音の変換システムが大変複雑で英語の音認識が日本語以上に難しいこと、英語を母語として習得する児童が、それらの文字と音の関係をどのように学習しているかについてご紹介があった。統合教育が推進されているアメリカでさえ、LD/Dyslexia を持つ児童・生徒のための専門的な学校が機能しており、読み書き障害をもつ学習者に対して、その学びの特性に合わせたアプローチが必要であることが強調された。英語の学習が始まって読み書き障害に気づく学習者がいること、また、母語である日本語において読み書き障害が出ている児童・生徒に対して、画一的な外国語の指導は危険であるということは、我々外国語教員が常に心に留めておくべきことだろう。

【報告: 長 加奈子 (福岡大学)】

## 基調講演 2 Q&A セッション

---

ユニバーサルデザイン英語教育：知ることで気づき、気づくことで始まる手立て

飯島 睦美（群馬大学）

本基調講演の内容は、(1) 教育におけるユニバーサルデザインの概要、(2) 教師は、何を知り、何に気づき、何ができるのか、(3) 読み書きの難しさなどのストレスに苦しむ学習者を救う教師の知識と意識の重要性の3点に大きくわけることができる。

(1) では、ことばそのものに対して難しさを抱える学習者についての理解が最重要であることの説明があった。ことばそのものに対する難しさが原因で、授業が理解できなかつたり、授業内の活動に取り組みせずに不登校になる傾向があることについての報告があったが、今まで、学習者に当然理解されているものとして進めていた英語の授業を、根本から見直す必要があるという衝撃を持った。

(2) では、英語学習の難しさの存在と難しさを引き起こす可能性を知ること、学習者のつまずきに気づくことができ、その手立てを工夫できるとして、具体的な説明があった。例えば、日本語ではあまり表面化しない読み書きの障害が、一つのアルファベット文字が複数の音と対応する英語では顕在化する事例が見られ、早期英語教育の開始とともに、小学校高学年、中学校以降で問題となる可能性があり対応が必要である。

(3) では、学習者が抱える問題に対応できる知識と学習者のつまずきにいち早く気づくことができる意識の重要性が述べられた。今後、学習者の多様性が大きくなり、通常学級を受け持つ教師も、ことばの難しさにストレスを感じている学習者に対応できる知識と、つまずきにいち早く気づき一人も取りこぼさない意識が必要なことが認識できた。

Q&A セッションでは、ユニバーサルデザインの英語教育を進めていくための基本的な姿勢や取り組み方法について、時間オーバーになるまで丁寧に説明いただいた。飯島先生の熱い思いが伝わる非常に有意義な講演であった。

【報告：島谷 浩（熊本大学）】

## オンデマンド配信型発表 Q&A セッション

---

### Room 1

#### 公募シンポジウム VS1

英語歌の授業利用における実践と課題

湯舟 英一（東洋大学）

中田 ひとみ（獨協大学）

藤本 淳史（拓殖大学）

朝熊 悠（関東学院大学）

英語学習の教材として、英語の歌を授業に取入れる効用について様々なアプローチの中から、選曲における問題提起と学習者の楽曲におけるリズム指向（中田）、ボーカロイドの発音教育への応用（朝熊）、オンライン授業における歌詞の語彙表現習得の工夫（藤本）、そして歌唱においてカナルピを有効に活用した YouTube での実践例（湯舟）を紹介し、それぞれの効果・有用性について議論した。

【報告：湯舟 英一（東洋大学）】

### Room 2

#### V2-1

An Analysis of the Quality of Organization in Novice EFL Students' Argumentative Writings with a Discourse Annotation Tool

MATSUMURA, Kana (Graduate Student,  
Waseda University)

SAKAMOTO, Kiyoko (The University of Shiga  
Prefecture)

Using a web-based annotation tool TIARA

(Putra et al. 2020), the authors researched the problem of coherence in essay writing of 50 11<sup>th</sup> grade Japanese students. In previous research, they extracted six factors that seem to cause coherence breaks: (1) improper order of ideas, (2) absence of connecting ideas, (3) redundant ideas, (4) multiple ideas in a sentence, (5) deviation from the topic, and (6) incomprehensible sentences. This study examined which factors were more related to essay organization, and it was found that items (5) and (6) especially were key in determining high or low scores. The Q and A session was well attended with several question coming from the audience.

【報告：米岡 ジュリ（熊本学園大学）】

#### V2-2

##### How Teachers Should Approach and Categorize English Phrasal Verbs

HAUGH, Sam (Kwansei Gakuin University)

This presentation reported on a corpus investigation to identify and categorize the frequency and semantic characteristics of phrasal verbs (PVs) in written essays by Japanese and Chinese EFL learners and English native speakers. In spite of difficulties in categorization which were discussed in some detail, the PVs found in the essays were classified into three semantic categories: directional, aspectual and idiomatic. Results showed lower frequencies for Japanese essays than for the other two groups, especially with respect to directional and idiomatic PVs. The Q and A session was well attended and interaction was lively.

【報告：米岡 ジュリ（熊本学園大学）】

#### V2-3

##### Expression of Discourse Function by Japanese EFL Learners and Its Intelligibility

HATTORI, Takuya (Osaka University)

The presentation researched how the discourse function of English intonation (given -new), which is not required in the Japanese English curriculum, is performed by Japanese English language learners. The research questions were: (1) How intelligible to native English speakers are discourse function expressions by Japanese English language learners? (2) How good is the discourse function in the intonation of Japanese learners of English? Using the Corpus *English Read by Japanese* (ERJ), native speakers evaluated 63.2% of the utterances of Japanese speakers as fairly intelligible, which the author concludes is rather inaccurate. Phonetic analysis of the Japanese intonation also found that the fall-rise tone especially was not sufficiently well pronounced by Japanese. The Q and A session was well attended and interested participants posed several questions.

【報告：米岡 ジュリ（熊本学園大学）】

#### Room 3

##### V3-1

##### 日本の EFL 環境における動機づけ方略に関する教員と学習者の認識の考察

川光 大介（大阪府立大学工業高等専門学校）

竹内 理（関西大学）

本研究では、外国語学習者の動機づけに効果的だと考えられる L2 動機づけ方略に対して学習者と教員が持つ認識の差が検証された。両者が最も効果的であると認識した方略は「達成感を得られやすい授業展開」であった。その他の方略についても、教員と学習者間で、効果的であると認識す

る方略は類似することがわかった。

【報告：今野 勝幸（龍谷大学）】

### V3-2

英語習熟度別クラス編成における習熟度の分散の  
大小がもたらす学習効果と心理状態への影響

新谷 真由（文京学院大学）

縣 由衣子（慶応義塾大学）

藤田 邦彦（文京学院大学）

本研究では、習熟度の分散が大きいクラスと小さいクラスで英語授業を受けた場合、成績と心理状態が異なるのかどうかを検証された。調査の結果、習熟度の分散が小さいグループの方に学期末にかけて成績に向上が見られ、また、不安も低下し、学習に対する態度も改善する傾向が見られた。

【報告：今野 勝幸（龍谷大学）】

### V3-3

動的等価を考慮した質問紙 FLCAS の翻訳

植木 美千子（関西大学）

竹内 理（関西大学）

八島 智子（関西大学）

山中 由香（近畿大学（非常勤））

本研究では、L2 不安の測定に用いられる Foreign Language Classroom Anxiety Scale (FLCAS) のオリジナル版（英語）、従来の日本語訳版、動的等価に配慮した日本語訳版が比較された。結果、オリジナル版との回答一致率という観点から、動的等価に配慮した翻訳の方が優れていることがわかった。同時に、日本語訳を行う時に留意すべき点が明らかとなった。

【報告：今野 勝幸（龍谷大学）】

### Room 4

#### V4-1

日本人高校生を対象としたクリティカルシンキング指導の効果 —ライティングにおけるクリティ

カルシンキング志向性とクリティカルシンキングスキルに焦点を当てて—

坂口 寛子（福岡県春日高等学校）

本研究では、因子分析に基づいた質問紙調査及び、論証文中のクリティカルシンキング 5 要素の頻出回数の分析によって検証が行われた。志向性の優位な増加は見られなかったが、ストラテジーについては優位に増加し、さらに、counterargument, rebuttal, non-rebuttal の 3 要素については、頻出回数の増加が見られたという結果であった。参加者からは、反論・反駁の具体的な指導方法の質問や、志向性に加え知識の向上もみられたのではないかという意見が出された。

【報告：眞崎 克彦（神戸親和女子大学）】

#### V4-2

英語プレゼンテーション視聴時の学習者の視線解析：客観的教育指標の抽出

大野 幸久（九州大学 大学院生）

冬野 美晴（九州大学）

プレゼンテーション時の効果的なアイコンタクトの指標を抽出するためにアイトラッキングの観察を行った。動画視聴実験での注視点座標データおよびビデオ視聴後の主観評価データにより、話者のアイコンタクト量が増えると視聴者の主観評価が高くなる傾向がみられた。考察として、1 分間で 10 回以上、1 回につき 0.7 秒上の指標が提案された。参加者からは、スクリーンを使用した理由、指標をどのように具体的に指導するのかという質問が出された。

【報告：眞崎 克彦（神戸親和女子大学）】

#### V4-3

（発表はキャンセルされました）

### Room 5

#### V5-1

TTS 合成音を活用しオンデマンド型のオンライン授業を乗り切る

東 淳一 (神戸学院大学)

オンデマンド型の授業用素材としての動画の音声、高品質 TTS 合成音を活用して作成し、実際に授業に使用した試みについて報告された。授業実施後の学生の評価は概ね良好であり、否定的な感想はなかったとのことである。質疑応答では、TTS 合成音の活用の必要性について賛同するコメントなどが寄せられた。

【報告：天野 修一 (広島大学)】

### V5-2

英文構造作図 Web アプリを用いた精読教育の新たな可能性

木村 修平 (立命館大学)

英文構造図の作図に特化した Web アプリの機能や特徴の紹介と、それを用いた大学での英語精読授業の実践について報告された。中間アンケートの結果では、アプリの利用に積極的ではない受講者からボタン編集画面の使いにくさが指摘されたり、マニュアルの整備を求める声が寄せられたりしたとのことである。質疑応答では、画面上の表記の問題等が指摘されたが、既に対応済みであるとの回答がなされた。

【報告：天野 修一 (広島大学)】

### V5-3

英語音声録音のスピーキングパフォーマンスへ及ぼす影響に関する分析－不安度軽減とスピーキング能力向上－

本久 郁子 (千葉大学)

古谷 裕美 (関東学院大学)

英語スピーキング授業における不安感に焦点を当て、授業内で反復的な音声録音を学生に課すことで不安感を減じ、スピーキング能力の向上を図った試みについて報告された。実践の結果、アン

ケートの約半数の項目において不安の減少が認められたとのことである。質疑応答では、この報告で使われたものとは異なるアプリの使用可能性についての質問などが寄せられた。

【報告：天野 修一 (広島大学)】

## ライブ配信型発表

---

### Room 1

#### 公募シンポジウム LS2

小中高大の語彙・文法学習をシームレスにつなぐ DDL 支援ツールの開発と授業実践

西垣 知佳子 (千葉大学)

川名 隆行 (千葉大学教育学部附属中学校)

山口 明香 (千葉大学教育学部附属小学校)

折原 俊一 (千葉大学教育学部附属小学校)

近藤 正隆 (日本体育大学荏原高等学校)

HORNE, Beverley (千葉大学)

物井 尚子 (千葉大学)

星野 由子 (千葉大学)

石井 雄隆 (千葉大学)

DDL とは、data-driven learning (データ駆動型学習) の略である。DDL では、専用の検索ツールを使ってコーパス (言語データベース) を検索すると、条件に合致する多数の例文がパソコンの画面に現れる。学習者は、検索結果の多様な英文を観察して、自分の力で英語の規則に気づいて探究的に英語を学ぶ。発表者らは、小中高校生を対象として、まず適切なレベルの教育用コーパスを構築した。次にそれらを教材として学ぶ DDL 支援ツールを開発した。続いて、既存の大学生用 DDL 支援ツールと接続させて、DDL という一貫した学習方法を通して、小中高大の語彙・文法学習の連携を実現させた。今回の発表では、独自開発した小学生用 DDL 支援ツール eDDL (<https://e.ddl-study.org/>) と、中・高生用 DDL 支援ツール hDDL (<https://h.ddl-study.org/>) を紹介

した。次いで、have をキーワードとして、小学校、中学校、高校で行った DDL 実践の成果ならびにそれぞれの学習者の学びの特徴を報告した。最後に、eDDL と hDDL の語彙と文法のレベルが、学習者に対して適切であるどうかを調査した結果を報告した。

【報告：西垣 知佳子（千葉大学）】

## Room 2

### L2-1

What are University Students' Perceptions of English as a Lingua Franca?

MIYASAKO, Nobuyoshi (University of Teacher Education Fukuoka)

日本人英語学習者（大学生）が持つ ELF への理解・考え方について調査が行われた。学習者は英語使用を通じた異文化理解をより重視していた。ELF が母語の異なる者同士での言語使用であることは理解されていたが、「標準的な英語」の学習に関心を持っている傾向も見られた。また、ELF の捉え方は学習者の熟達度にも影響されることが示された。

【報告：藤永 史尚（近畿大学）】

### L2-2

A Sociocultural Analysis of Online Writing Collaboration in an International Virtual Exchange

CARR, Nicholas (University of Electro-Communications)

WICKING, Paul (Meijo University)

International Virtual Exchange (IVE)において、日本人大学生が交流相手のアメリカ人大学生からオンラインで助言を受けながら英作文をする協働作業について、著者らの実践を事例として分析・考察した。学習者は交流を通じて言語的知識を多面的に発展させることができた一方で、フィード

バックを活用しきれなかった学習者もいた。適切な教師の指導や介入が必要であることが示唆された。

【報告：藤永 史尚（近畿大学）】

### L2-3

English Intonation by the Japanese Future Elementary School Teachers from the Perspective of Intelligibility

NISHIO, Yuri (Meijo University)

This presentation is about the experiment about English intonation conducted on 26 university students in an elementary school teacher's training course. The presenter recorded the students' oral reading of target sentences and examined the nucleus placement patterns by listening to the recordings. Also, the 3 English native-speaking listeners judged the meaning of the target sentences. The result showed that the nucleus placement pattern was not consistent and influenced the intelligibility of those utterances. This suggested that sufficient English intonation training is necessary for future elementary school teachers to understand and teach English intonation.

【報告：本沢 彩（関東学院大学）】

### L2-4

Hepburn? Kunrei? Wapro? A Universal Design Approach to Romaji Education in Japan

YONEOKA, Judy (Kumamoto Gakuen University)

A confusion occurs among the varieties of Japanese romaji. The presenter reported a survey on 108 university students about their awareness of 3 types of romaji: Hepburn, Kunrei, and Wapro. The results showed the followings:

a) students' initial awareness of romaji is mainly in 1-2 or 3-4 grade of elementary school through various ways; b) their perceived purposes of romaji were mainly communication with foreigners; c) there was a significant gap between romaji in the textbook and that in practice. Therefore, a single romanization based on Japanese phonology and orthography was necessary to avoid confusion. Also, this solution had some advantages in making the romaji system simple and teachable.

【報告：本沢 彩（関東学院大学）】

### Room 3

#### L3-1

「言語の働き」を意識した帯活動のデザイン—高等学校における「話すこと [やりとり]」の指導の実践研究—

戸井永 貴宏（帝京平成大学）

山本 大貴（信州大学）

陣野 俊彦（東京都立大島海洋国際高等学校）

本発表は、高校生の「やり取り」能力の向上を目指し、帯活動として行った実践の報告とその効果の検証を行ったものである。表現リストを作成して明示的指導を行った後、同じタスクを繰り返し行う活動を行い、その効果を流暢さ、意見、相づち、質問から検証した。その結果、全ての項目で向上が見られ、かつ学生は自身の能力向上を実感できていたことが明らかになった。

【報告：佐藤 健（東京農工大学）】

#### L3-2

双方向型コミュニケーション活動を実現する対面・オンライン併用ハイブリッド型授業の試み

野村 和宏（甲南大学）

本発表は、対面授業を同時配信しながら、オンライン参加の学生に対しても双方向コミュニケー

ション活動を担保できるハイブリッド型授業を、発表者のスピーキング授業での実践を通して提案するものであった。カメラを教室の前後に設置し、マイクを教室の真中に設置することにより、対面・オンライン両方の学生に対して充実した学びの場を提供できるとした。

【報告：佐藤 健（東京農工大学）】

#### L3-3

専門高校における教科連携型授業での ESP の可能性

仲山 雄二（熊本県立芦北高校）

専門高校の特性を生かした、専門学科との連携による教科横断型の英語授業の取り組みについて報告が行われた。自由記述による生徒の感想には肯定的なものが多かったようである。質疑応答では、高大接続にむけた ESP の可能性に関するコメントや、授業時間や授業方法、プレゼンの練習方法に関する質問などがあつた。

【報告：岩崎 剛毅（東京大学 大学院生）】

#### L3-4

短期集中プログラム SIGLOC-online における COIL 型学習 (Collaborative Online International Learning) の実践報告：パイロットケースからの示唆

布施 邦子（大阪市立大学）

ウォレスタッド 千鶴子（大阪市立大学）

小村 みち（大阪市立大学）

中井 一芳（大阪市立大学）

中島 義裕（大阪市立大学）

大阪市立大学において実施された、COIL 型教育を取り入れたソーシャル・イノベーター育成プログラムである SIGLOC-online の成果に関する報告が行われた。参加者による評価では、他国の学生との協働学習について肯定的な意見があつた一方で、同期の困難さやタスク説明の不明確さな

どについての指摘もあったようである。質疑応答では、参加学生のレベルや学生の英語力の変化に関する質問があった。

【報告：岩崎 剛毅（東京大学 大学院生）】

## Room 4

### L4-1

逆シャドーイングに基づく瞬時的明瞭度の自動計測と音声認識精度の比較—音声認識は人間の瞬時的懲戒にどこまで迫れるのか？—

峯松 信明（東京大学）

中西 のりこ（神戸学院大学）

学習者の英語の読み上げが 3 手法（多様な言語背景をもつ聴取者らによるシャドー[S], 聴取者らによる原稿を見ながらのスク립トシャドー[SS], 音声認識機能[ASR]) で書き起こされ、手法ごとの単語認識の傾向や、S-SS の差に見られるシャドー音声の崩れなどが報告された。ASR を教育利用する際の留意点や、現在の ASR がない技術開発という研究の方向性が示された。

【報告：山内 優佳（広島大学）】

### L4-2

多読は語彙推測能力の訓練になりうるか—大学生対象の短期多読プログラム—

山内 勝弘（広島大学）

オンラインによる週 3 時間・8 週間の多読プログラムの実施を通じた、語彙推測能力の 3 要素（品詞特定・文脈活用・語義推測）の変容について報告された。特に「品詞特定」で得点の上昇が顕著であった。「語義類推」は下位群では得点の上昇があったが、上位群では減少が見られ、個人の推測能力の制度に限界があることが示唆された。

【報告：山内 優佳（広島大学）】

### L4-3

コアイメージと動画を利用した語彙学習の効果

李 相穆（九州大学）

本発表では、外国語で語彙を学習する際にイメージを利用することの有効性を先行研究からの知見をもとに説明した上で、学習者にとって有効なイメージとなっていない事例なども紹介された。その上で、Web 上で語彙学習に有効活用できるイメージを収集するシステムの構築を提案された。フロアからは、動画利用への提言があった。

【報告：小山 敏子（大阪大谷大学）】

### L4-4

コンテンツ・シャドーイングとリピーティングが英文内容理解に与える影響

山内 豊（創価大学）

本発表では、先行研究の知見をもとに、外国語コミュニケーション能力を伸ばすのに有効であるとされるシャドーイングとリピーティングのどちらが、より英文の内容理解に役立つのかを、習熟度が異なる学習者を対象として行った調査を報告したものである。結果として、シャドーイングのほうが習熟度にかかわらず内容理解には有効であると説明された。

【報告：小山 敏子（大阪大谷大学）】

## Room 5

### L5-1

ニューノーマル時代におけるメディアを活用した模擬授業実践

深田 将揮（神戸学院大学）

教員養成の英語科教育法などの授業において、オンデマンド、リアルタイムの ZOOM、対面＋ZOOM というそれぞれ違った方法での学びにおける効果、課題について報告された。さらに、振り返りなどのコメントのテキストマイニングの結果から考察された。学生の模擬授業発表も YouTube、LMS、ZOOM など多彩な方法で実施されており、コロナ禍以降もこのような新しい方法の可能性が

示唆された。

【報告：西尾 由里 (名城大学)】

#### L5-2

Engage VR を利用したオンデマンド型語学教育コンテンツ作成の試み

MEHRASA, Alizadeh (大阪大学)

POPOVA, Ekaterina (大阪大学)

北岡 千夏 (大阪大学)

大前 智美 (大阪大学)

ロシア語学習教育において Engage VR を利用し、教室内での語彙学習とまた自然環境の中での語彙学習というコンテンツの作成の試みについて報告された。また実際学習した学生に対する効果について、ARCS 学習意欲向上モデルを使い分析した中で、対面授業以上に体感的であるという回答が見られたという。今後さらにコンテンツの充実とその可能性を探っていくとのことであるが、新たな遠隔協調学習の方法となり得ることが示唆された。

【報告：西尾 由里 (名城大学)】

#### L5-3

Immersive 360-degree Video as a Medium for Teacher-led VR Material Development

BLANCO CORTES, Laura Maria (Kyushu Snagyo University, Part-time)

FUYUNO, Miharu (Kyushu University)

TOMOTARI, Mikako (Kyushu University)

教師主導の教材として開発された 360 度ビデオについての研究発表。参加者からは、教師主導型であることの意義、及び教材としてのビデオ活用の成果、この教材を活用した評価のあり方等についての議論がなされた。

【報告：高橋 美由紀 (鈴鹿大学)】

#### L5-4

Tablet Delivered Speaking Test for Japan's University Entrance Exam

MOTTERAM, Johanna (British Council)

日本の大学入試テストに、タブレットを活用してスピーキングテストを実施することに対する研究発表。参加者からは、CEFR の視点、日本への応用について、また全ての高校生に対する高校での指導等の検討事項等について活発な議論がなされた。

【報告：高橋 美由紀 (鈴鹿大学)】

8 月 22 日 (日) : 第 3 日

ライブ配信型発表

Room 1

公募シンポジウム LS3

日本語を母語とする中学生の英語産出能力の発達調査 : Step-Up English Project

杉浦 正利 (名古屋大学)

江口 朗子 (名古屋女子大学短期大学部)

阿部 真理子 (中央大学)

村尾 玲美 (名古屋大学)

古泉 隆 (名古屋大学)

阿部 大輔 (中部大学)

昨年度から 5 年間の計画で行っている科研費に基づく「日本語母語英語学習者の英語産出能力の発達研究」(20H01281) で、昨年度の予備調査から本年度の本調査の開始までを報告した。まず、杉浦より、本調査の目的とデータ収集の計画の概要について説明し、次に、阿部真理子より、これまでの学習者コーパスの研究例の紹介とともに、学習者コーパス研究の中での本プロジェクトの位置づけの説明があった。第 3 節では、江口より、第二言語の産出能力に関する処理可能性理論の説明とこれまでの日本語母語英語学習者を対象にした

発達段階の先行研究の紹介があった。第4節では、コーパスの目的とデータ収集の条件を踏まえた産出データの収集方法と収集されたデータの処理手順について説明があった。次に、予備調査とそれに基づく6セットのスピーキングタスク開発について江口より説明があった。第6節では、古泉よりスピーキングデータの収集で使用したPC用アプリについて具体例を示しながら説明があった。最後は、村尾によるアンケートデータに基づいた中学生の英語学習背景情報の分析結果と、阿部大輔による第1回予備調査による産出データの概要の報告があった。ディスカッションでは、スピーキングタスクで疑問文を産出させることは重要ではあるが中学生には難しいのではないかという質問があり、第二言語の処理能力の測定における必要性と、対面ではなくコンピューターを使つてのデータ収集という制約と、日本の英語教育の現実とが絡み合う興味深い議論を行うことができた。

【報告：杉浦 正利（名古屋大学）】

#### 公募シンポジウム LS4

アウトプットに着目した学習者の発話分析—入学期と中学年における Information Gap Activity の実践を通して—

眞崎 克彦（神戸親和女子大学）

佐藤 祐里子（関西大学）

星原 光江（光華小学校）

松延 亜紀（大阪教育大学）

井狩 幸男（大阪市立大学）

泉 恵美子（関西学院大学）

本シンポジウムでは、インプットとの関係性を踏まえた上で、アウトプットの重要性に焦点をあてた提案が行われた。初めに、学習指導要領の考え方におけるコミュニケーション活動を行うことの意義、アウトプットの定義及び本研究における理論の説明があった。その後、アウトプットを促進させる手立てとして、インフォメーションギ

ャップ アクティビティを活用した入学期と中学年における実践報告がなされた。両方の実践とも、Ibarrola & Hidalgo, (2017)の先行研究により、7つの「意味交渉のストラテジー」を尺度としたアウトプットの分析が行われた。その後、スピーキング指導理論の視点からの考察と示唆、及び、脳科学の視点からの示唆がなされた。

【報告：眞崎 克彦（神戸親和女子大学）】

#### Room 2

##### L2-5

Developing an Effective Hybrid Blended Learning Environment for High School EFL Students

NOXON, Erin (Sagano High School)

コロナ禍での高等学校における、英語教育環境をどのように整えるのかについて、カリキュラムの編成・教室環境の整備、LMSを活用した授業計画といった観点から振り返った報告がなされた。また、コンピュータ端末をも言い手1年の実践を経た生徒の反応についても振り返った。今年度はタブレット端末での実践を行っており、今後の継続的な報告にも期待したい。

【報告：大和 知史（神戸大学）】

##### L2-6

The Synchronous Online Flipped Learning Approach (SOFLA®) in a Literacy Methods Class for Teachers

MARSHALL, Helaine, W (Long Island University-Hudson)

WALLESTAD, Chizuko, K. (Osaka City University)

発表者は、オンラインでの反転学習を促進させるアプローチとして、同期型オンライン反転授業教授法 (SOFLA) という8つのステップからなる学習過程を提唱している。そのアプローチを用い

たアメリカの大学での実践を紹介し、受講生の反応をアンケート調査から検討した。発表者は、このアプローチは、日本の言語教育にも応用が可能であると述べ、それらを活用した実践者との情報交換を積極的に求めており、今後の広がりが楽しみな発表であった。

【報告：大和 知史（神戸大学）】

## L2-7

“When Do Sensei Have Time for Meeting?”  
Address Terms Used by Indonesian Students to Japanese Professors in Email Communication Using English as Lingua Franca

BALMAN, Rezky Pratiwi (Kyushu University)

LEE, Sangmok (Kyushu University)

本発表は、インドネシアからの留学生が、日本の担当教員・指導教員に英語でメールを送る際、2人称代名詞として Sensei を用いる事例があることを紹介し（例： Could Sensei give a good suggestion on paper?）、100のメール文面を収集し、その中での Sensei の使用について検討したものである。インドネシア語では教員に対して (ba) pak (父) や (i) bu (母) と呼ぶことがあり、そのため一定の権威を持った年上に対して語用論転移が起こって Sensei となっているとのことであった。

【報告：大和 知史（神戸大学）】

## Room 3

### L3-5

TED Talks を使用した遠隔授業で大学生の英語力は向上するか

長谷川修治（植草学園大学）

TED Talks を使用した遠隔授業で、大学生の英語力が向上するかを検証する研究であった。英語力の向上は、TED Talks の授業（計 10 話・10 回）の前後に実施された、授業とは無関係の英語テス

ト（20 問 20 点）の成績比較によって分析され、その結果、遠隔授業とはいえ、その都度与えられた課題をこなして英語力に結びつけてゆく積み重ねが最終的な英語力として結実することが示唆された。

【報告：入江 潤（一社・educore）】

### L3-6

日本語学習者と英語学習者の映像メディアを通じた文化解釈－異文化間教育に向けて－

保坂 敏子（日本大学大学院）

柳谷 孝一（神奈川県立上溝南高等学校）

言語学習者は映像メディアから言語以外に何を文化として捉えているのかを明らかにする研究であった。結論では、学習者の文化解釈は多様であること、それらの認識は固定的でなく一つのイメージに留まらないこと、更には、グループの話し合いによって認識は変容することが報告された。このことから、言語教育で、映像メディアに対する学習者の多様な文化解釈をリソースとして異文化間教育が行えることも示唆された。

【報告：入江 潤（一社・educore）】

### L3-7

リアルタイム型オンライン国際協働型学習における学生の顔出しの影響

安西弥生（国際基督教大学／教育テスト研究センター）

COIL 型学習における「顔出し」の影響についての研究であった。結論では、顔出しのある、なしは「世界共通語としての英語」「自己効力」「オープンラーニング」に対する学生の認識には影響を与えないものの、コミュニケーションスタイルには影響を与えることが報告された。COIL 型学習において学生に口頭でのコミュニケーションを促したい場合は、「顔出し」のほうが良いことが示唆された。

【報告：入江 潤（一社・educore）】

柳 善和（名古屋学院大学）

高橋 美由紀（鈴鹿大学）

## Room 4

## L4-5

課題、教材提示、個別・協働学習の違いによる学習者の脳血流変化の分析

中野 秀子（北九州市立大学（非常勤））

植田 正暢（北九州市立大学）

夏目 紀代久（九州工業大学）

タスクや、教材提示方法・タスクの難易度・学習形態などの条件の違いによって、英語学習者の脳活動がどのように変化するかを明らかにするため、fNIRS を着用した参加者（18名）に合計 11 種類のタスクを実施し、脳活動を測定。上位群と下位群で、活動中に優位に差が現れた脳部位について報告がなされた。これらの結果から、アクティブ・ラーニングにおいて高い学修を導くモデルの提案が行われた。

【報告：近藤 睦美（京都外国語大学）】

## L4-6

辞書検索行動の質的分析 1—電子辞書と Google 翻訳の場合—

小山 敏子（大阪大谷大学）

藪越 知子（日本大学）

大学生英語学習者が辞書検索行動を行う際、電子辞書とスマホどちらのツールを使うかによって行動が異なるのかを明らかにするため、参加者 2 名を対象に行った探索的予備実験の報告。英語授業においてスマホ派が多勢を占める中、スマホを用いた学習ストラテジー指導などの必要性についてもフロアから意見が出された。

【報告：近藤 睦美（京都外国語大学）】

## L4-7

小学校英語教育における即興的で主体的な対話の指導について

小学校英語教育における「即興的で主体的な対話」の指導にフォーカスを当て、新学習指導要領の下、どのようにこの指導を実現しているかを明らかにするため、検定教科書でどのように扱われているかを、具体例を示しながら報告がなされた。また、小中接続についても触れ、小学校での即興的で主体的な対話が、中学校の「話すこと（やり取り）」の領域指導とどのようにつながっていくかの説明がなされた。

【報告：近藤 睦美（京都外国語大学）】

## オンデマンド配信型発表 Q&amp;A セッション

## Room 2

## V2-4

Japanese to English or English to Japanese: What's the difference?

TOMEI, Joseph (Kumamoto Gakuen University)

コミュニケーションの授業における学習者の L1 の使用についてはとかく敬遠されがちだが、学習者が L1 を英語学習においてどのように使用しているかを教師が理解することは、見落とされている側面である。本発表では 4 コマ漫画を使ったプロトコルで、学習者が英語と日本語でシーンを描写するデータを入手・分析をし、その結果を紹介した。

【報告：今井 由美子（同志社女子大学）】

## V2-5

Showing Understanding in the Classroom-A Qualitative Study

HINE, Andrew (University of Teacher Education Fukuoka)

グラウンディングとは人が相互理解に対する十

分な自信を得るために経験するプロセスで理解していることの肯定的な証拠を示すことで達成され、この概念は、英語の授業を行う上で重要な概念である。日本の小学校教員の多くは英語を教えることに不安を感じており、このような積極的な理解の証拠をコミュニケーション活動に取り入れることで、英語の授業が大きく改善されると提案をした。

【報告：今井 由美子（同志社女子大学）】

## V2-6

### Building an Online Self-regulation Learning Model for Emergency Remote Teaching: A Japanese EFL Context

MOLNAR, John Andras (Kinjo Gakuin University)

緊急遠隔授業期間における日本の大学生の第二言語（L2）学習動機と自己調整学習の関連性について質問紙調査を行った。498名の大学生が調査協力し、データを探索的因子分析にかけた。その結果、理想的なL2学習動機の高い協力者が選択したモデルは、3つの因子（目標設定、自己評価・援助要請、環境構造化）を持つこと、L2自己学習動機が低い協力者が選択したモデルは4つの因子（目標設定、自己評価／助けを求めること、環境の構造化、タスク戦略）であった。クラスメートとのつながりの必要性は予想外の発見であった。

【報告：今井 由美子（同志社女子大学）】

## Room 3

### V3-4

オンラインでのスピーキング授業 — 赤ペン添削と修正力 —

田淵 龍二（ミント音声教育研究所）

スプリング ライアン（東北大学）

自動音声認識（ASR）とデジタル赤ペンで可視

化された技術を用い、即時の発音評価を可能とする手法が報告された。オンラインでの自律学習として5回までのトライ&エラーを繰り返した結果、徐々に正答率が上がっていく事例が多く見られた。質疑応答では、演繹的な指導法及びシラブル以上の言語単位への考慮などが提案された。

【報告：中田 ひとみ（獨協大学）】

### V3-5

ピッチは役立つのか？ — 英文中の語彙認識に対するピッチの効果分析 —

山田 貴将（南山大学）

自然音声とPraatを用いて周波数を操作した平板な音声を聴かせ、ディクテーションによる語彙認識の正答数を測定。検証の結果、全般にまた内容語においてピッチ情報を持つ方に有意に正答率が高いということが確認された。質疑応答の時間では、単語同志の結びつきや他の言語情報の影響などの可能性について意見交換が交わされた。

【報告：中田 ひとみ（獨協大学）】

### V3-6

語の組み合わせが統語構造の学習に及ぼす影響

坂東 貴夫（金沢学院大学）

複雑な文章の統語構造と意味的適切性をガーデンパス現象を含む文章で検証。40文の文法性を判断、その後に読解課題を介入、2週間後に同一テストを実施したところ有意に正当数が向上した（さらなる実験データが必要とのこと）。読解における読み戻し禁止との関連に対しては、文の種類によっては読み戻し＝反復接触が必要になるとの回答であった。

【報告：中田 ひとみ（獨協大学）】

### V3-7

映画に出現する必須コロケーションの量的及び質的分析の試み

古樋 直己 (大阪工業大学)

映画のセリフを基本的語彙の習得に生かす目的で分析・検証を実施。1,572種類のV-Nコロケーションと165作品を組み合わせ、動詞+名詞の出現数をデータとした。量的には作品中の語彙出現数の頻度に限りがあるが、質的には、分類法によってはその語彙が中心的な意味を持つか否かなどの点で教育に活用できる可能性が示唆された。

【報告：中田 ひとみ (獨協大学)】

#### Room 4

##### V4-4

外国語授業を自動分析するAI Mobile COLTシステムの開発

石塚 博規 (北海道教育大学旭川校)

英語の授業をAIを使って自動分析し、授業改善に資するシステムの開発報告があった。録画した授業動画を処理することで自らの授業が自動的に点数化されるため、客観的な評価につながる可能性がある。一方、音声認識には教員にマイクが必要であること、音声認識の精度は90%程度であること、コーディングのミスは手作業で修正することが必要であるなどの問題点があり、今後の技術・研究の進展が待たれるところである。

【報告：神谷 健一 (大阪工業大学)】

##### V4-5

子どもの物語を構成する能力の発達－クライマックスから解決へ－

稲葉 みどり (愛知教育大学)

文字のない絵本『Frog, Where Are You?』を利用して日本語を母語とする8歳児と9歳児、各10人から収集した音声資料を文字化したものをKH Coder 3でテキストマイニングを行い、頻出語彙の共起ネットワークを検出する研究についての報告があった。発表者自身による過去の研究では3歳から7歳を扱っており、幼児の場合は前半の再

構成が、8歳児・9歳児は後から判明した事実を再構成する力の萌芽が確認された。

【報告：神谷 健一 (大阪工業大学)】

##### V4-6

重回帰分析における因果関係の誤謬をなくすために一相対的重みづけ分析による解釈－

水本 篤 (関西大学)

本発表では従来の研究でもよく行われてきている相関係数による解釈について「文法の能力が高いとリーディングの能力が低くなる」といった誤った解釈が起りうることを避けるため、相対的重みづけ分析やランダムフォレストを併用して正しく解釈する必要性について指摘があった。発表者への質疑応答ではこのような手法の限界についての議論が寄せられた。

【報告：神谷 健一 (大阪工業大学)】

##### V4-7

日本の英語学習者を対象とした英語フォーミュラ知識測定テスト作成の試み

金澤 佑 (関西学院大学)

泉 恵美子 (関西学院大学)

磯部 ゆかり (京都精華大学)

門田 修平 (関西学院大学)

平井 愛 (神戸学院大学)

松田 紀子 (近畿大学)

三木 浩平 (近畿大学)

森下 美和 (神戸学院大学)

渡部 宏樹 (情報通信研究機構)

LET関西支部基礎理論研究部会メンバーによる大規模な共同研究プロジェクトの一部に関する現状報告である。本発表では金澤(編)(2020)によるフォーミュラ親密度リストを使用した2種類のテスト(意味再認、形式手がかり再生)を実施しデータを収集・分析した。その結果、フレーズ語彙サイズテストとの間に正の相関が見られ、基準連関

妥当性が示唆された等の報告があった。

【報告：神谷 健一（大阪工業大学）】

## Room 5

### V5-4

#### YouTube to Understand Popularity for Material Development

IKUTANI, Daichi (Waseda University)

本発表では、英語を学ぶ日本人学生にとって、YouTube 動画のどの部分が最も人気があるのかを判断するための新しい研究フレームワークを紹介しました。発表者は、日本人英語学習者向けの YouTube チャンネルを非公式に検索し、リストを作成した後、最も人気のある 4 つのチャンネル（登録者数で測定）と最も人気のある 3 つの動画（視聴回数で測定）を調べ、それらを最も人気のない 4 つのチャンネル（登録者数で測定）と最も人気のない 3 つの動画（視聴回数で測定）と比較しました。動画の分析は、動画の種類、動画の言語的側面、作者と視聴者のやりとり、司会者が話す言語とその言語能力、字幕、動画に登場する人物、撮影場所、信憑性という 9 つの異なる尺度で行われました。また、人気のあるチャンネルには、Vlog の普及や YouTuber の存在など、いくつかの共通点が見られました。今回の予備調査では、今後の動画研究の発展が期待されており、教師や動画を作成する人たちに、リスナーに人気のある機能を紹介することができる。YouTube の動画をデータセットの一部としてよりよく識別するためのいくつかの質問と提案がなされたほか、研究のためのいくつかの質問もなされました。

【報告：Joseph Tomei（熊本学園大学）】

### V5-5

#### A Search for the "Best-fit" Listening Strategies

OTUSKA, Tomomi (Osaka Jogakuin College)

SAKI, Michi (Doshisha Women's College)

IMAI, Yumiko (Doshisha Women's College)

WAKAMOTO, Natsumi (Doshisha Women's College)

本発表では、日本の大学生が直面しているリスニングの課題を取り上げ、これらの学生が「ベストフィット」戦略のリスニングを獲得できる可能性、そしてそれがリスニング上達の可能性であるかどうかを調査しています。この小規模な研究プロジェクトでは、学生が最適なストラテジーを探し出して活用した結果と、2 つの対照群（ネイティブスピーカーの教師との共同作業、または CALL 教材を使った非ネイティブスピーカーとの共同作業による自律的な練習）の学生の結果を比較しています。VLT (Vocabulary Level Test) を用いて、学生がリスニングのための最適なストラテジーを見つけることができたことが示されたが、一部の学生は自律的に作業をすることができず、締め切りや監督が必要であった。しかし、自律的に学習する機会が与えられたことで、学生は自分のリスニング能力に自信を持つことができた。質疑応答では、自律性に関する研究との関係や、VLT に関する質問が出ました。

【報告：Joseph Tomei（熊本学園大学）】

### V5-6

自発的な英語学習におけるチャットボットの有効性—開発と検証実験—

森部 想水（九州大学 大学院生）

吉村 理一（九州大学）

冬野 美晴（九州大学）

LINE のチャットボット (CB) を活用し、学習者が低コストで自主学習を行える科学技術英語学習システムの開発を行って有効性を検証したものである。この研究の特徴は、既存の CB が生成ベースモデルで作成されていることに対して、検索ベースモデルで構築することにより、既存の CB の問題を解決しようとしている点である。この CB

を利用した理系学生の英語学習時間・単語テストの結果は、PDFで学習した学生と比べて「中程度優越」していることがわかった。

【報告：中島 亨（福岡教育大学）】

#### V5-7

海外を目指すアスリートやコーチを対象としたタスクベース授業の実践報告

西条 正樹（びわこ成蹊スポーツ大学・神戸大学  
大学院 大学院生）

ジャンル準拠タスクを、将来海外にスポーツ留学を目指す学習者に与え、学習者が必要な意味形成資源をどのように学習していったのかを調査した研究である。発表では、ジャンルの視点を組み入れることで、学習者は必要な語彙・文法やジャンル構造への認識を徐々に高めたこと、また構造言語学（SFL）の視点をタスクに取り入れることで、意味機能毎に効果的な学習プロセスを特定しやすくなることが示された。

【報告：中島 亨（福岡教育大学）】

#### V5-8

Google Workspace ツールを活用した生徒の学習支援

真島 由朱（大阪府立箕面高等学校）

2020年度にすべての大阪府立高校に導入された Google Workspace for Education を活用した英語学習支援の事例報告であった。Google Forms を活用した予習課題や質問受付、生徒が何度でも取り組める自学自習教材の配信など、生徒の学びを深めるさまざまな活用事例が紹介された。

【報告：工藤 泰三（名古屋学院大学）】

#### V5-9

インターネット動画コンテンツを利用した半自律的英語学習－「Video Report: My Phrases List」の実践報告－

松井 夏津紀（京都外国語大学）

授業外でオーセンティックな英語のインプットを与えるために行われた、学習者に毎週10分好きな動画を視聴してもらい英語表現を学んでもらう活動「Video Report: My Phrases List」の実践報告であった。約9割の学生の視聴頻度が増加し、約7割の学生がリスニング力の向上を実感するなどの成果が得られた。

【報告：工藤 泰三（名古屋学院大学）】

#### V5-10

学習者特性がオンライン英語学習に及ぼす影響の検証

大澤 真也（広島修道大学）

中西 大輔（広島修道大学）

阪上 辰也（広島大学）

石井 雄隆（千葉大学）

オンライン英語学習プログラムを利用した授業で、学習者特性がオンライン学習課題の達成度や英語力の伸びなど英語学習の成果にどのように影響するかを検証した。両年度においてログイン回数や学習時間の多さが TOEIC スコアの伸びなどにはつながらないこと、また2020年度には2019年度に比べログイン回数や受講レッスン数の減少、および個人間の学習時間の大きなばらつきが観察された。

【報告：工藤 泰三（名古屋学院大学）】

#### V5-11

工学系学生の創造的思考を育む CLIL オンライン授業実践

川島 嘉美（石川工業高等専門学校）

STEAM 教育を行う上で工学系学生に不足する Art についての学びを、CLIL のアプローチに基づいて英語科目に取り入れようというオンライン授業実践報告であった。学生のアンケート結果および自由記述コメントから、本授業実践が学生の英

語力の向上だけでなく、学生の新たな視点の獲得や思考の深化に寄与したことが示唆された。

【報告：工藤 泰三（名古屋学院大学）】

## 全体シンポジウム

---

外国語教育におけるユニバーサルデザインの現状とニーズ

コーディネータ・パネリスト 雪丸 尚美（北九州市立大学）

パネリスト 村上 加代子（甲南女子大学）

パネリスト 佐藤 良子（麗澤大学）

このシンポジウムの目的は、日本の英語教育においてユニバーサルデザイン（UD）教育を実践する際の課題を同定し、それら課題に対応するための取り組みや知恵を共有することであった。具体的には発表者3名によって、以下の報告があった。

（1）日本の英語教育におけるユニバーサルデザイン：現状と課題（雪丸 尚美・北九州市立大学）

本発表では、UDの定義や諸原則、またこれまでの経緯や諸分野での展開を概観し、教育におけるUDの複数の潮流が紹介された。学習者の「多様性」を尊重し多様な学習者すべてに開かれた教育を目的とする必要性が示唆された。

（2）英語の読み書きに困難のある中学生への指導（村上 加代子・甲南女子大学）

本発表では、ディスレクシアとして知られる、読み書き困難のある生徒の特徴を踏まえた指導方法に関して、実践例が説明された。同様の困難さや英語学習上の誤りは日本語母語話者の多くにもあてはまる。学習初期から丁寧に音声や文字指導を行うことが有効であることが提言された。

（3）ユニバーサルデザインの視点を持ったテストの作成（佐藤 良子・麗澤大学）

授業のUD化に取り組む際には、小テストや定期テストについてもUD化することが求められる。本発表では、いかにテストの体裁に配慮して設計

するかについて、フォントの種類やサイズ、レイアウトなどについて具体例を示しながら提言された。

Q&Aセッションでは、スピーキングテストやリスニング授業実践において、どのような工夫ができるかについての議論が活発に行われた。

【報告：古村 由美子（名古屋外国語大学）】

## 閉会行事

---

司会：植田 正暢（大会実行委員長、北九州市立大学）

挨拶：菅井 康祐（外国語教育メディア学会 関西支部長、近畿大学）

## 2020年度 本部 事業報告

### 1. 開催行事関連

新型コロナウイルス感染症対策のため全国大会の開催無し

### 2. 総会

開催日：2020年9月19日（日）

開催場所：Web会議システム

### 3. 出版・広報関係

1) 全国ホームページを利用した広報

2) 全国メーリングリストを利用した広報

3) LETblogの発行（毎月1回発行）

4) Newsletter No. 99の発行（Web上で2021年3月公開）

### 4. 運營業務関連

1) 支部長連絡会の開催：2020年8月29日（土） Web会議システム

2) 理事会の開催：2020年8月29日（土） Web会議システム

3) 会長・副会長会議の開催：2021年1月24日（日） Web会議システム

### 5. 学会機関誌

Language Education & Technology 第57号 2020年10月 J-STAGE で公開

### 6. 学会賞

#### 1) 学術賞

受賞者：山西博之氏（中央大学）

対象業績：外国語教育におけるライティング指導・研究の展開と、その基盤としての Web システムの開発

#### 2) 教材開発賞

受賞者：今尾康裕氏（大阪大学）

対象業績：言語研究・教育用アプリケーションの開発とそれらの無償公開

### 7. その他

1) 賛助会員に対するバナー広告の無料開放（9社）

2) 賛助会員の取り組み紹介企画（オンライン授業支援: LET 賛助会員各社の取り組み）

以上。

## 2020年度 外国語教育メディア学会本部 決算報告書

2021年8月3日

自2020年4月1日～至2021年3月31日

項目	予算額	決算額	内 訳
前年度繰越金	190,782	190,782	
賛助会費	1,200,000	1,150,000	50,000円 × 23件
一般会費	1,200,000	1,238,000	前年度各支部会費収入 × 0.18
雑収入	1,000	10,129	機関誌頒布(1,000円)+送料(195円)+その他(8,933)
収益計(①)	2,401,000	2,398,129	
法人化準備積立金	92,400	92,400	
収入計(③)	2,493,400	2,490,529	

費 目	予算額	決算額	内 訳
印刷費	336,600	336,600	機関誌57号
通信費	50,000	9,459	切手代等
ネットワーク関係費	850,000	575,300	本部サーバー管理・業務委託料・ドメイン維持料など
業務委託費	0	24,200	あゆみコーポレーション(前年度分)
旅費交通費	250,000	0	
会議費	25,000	0	
全国大会開催費	100,000	46,200	全国大会参加申し込み機能作成(アゼット)
国際交流委員会費	20,000	0	
雑給	0	0	
事務用品費	40,000	41,562	Xスタンプ、封筒、表彰状作成、賞状額
支払手数料	8,000	3,773	
雑費	20,000	20,000	慶弔費
費用計(②)	1,699,600	1,057,094	
法人化準備積立金	92,400	92,400	
支出計(④)	1,792,000	1,149,494	

当期利益 【収益(①)-費用(②)】	701,400	1,341,035	
次年度繰越金 【前年度繰越金+当期利益】	892,182	1,531,817	
当期収支 【収入(③)-支出(④)】		1,341,035	

以上、報告します。

外国語教育メディア学会本部事務局

事務局長 見上 晃

以上、相違ありません。

2021年8月3日

会計監査 奥山 慶洋 会計監査 森 好紳 

## 2021年度 本部 事業計画

### 1. 開催行事関連

#### 第60回全国研究大会

ライブ配信：2021年8月20日（金）～22日（日）

オンデマンド配信：2021年8月13日（金）～29日（日）

### 2. 総会

開催日：2021年9月3日（金）

開催場所：Web会議システム

### 3. 出版・広報関係

1) 全国ホームページを利用した広報

2) 全国メーリングリストを利用した広報

3) LETblogの発行（毎月1回発行）

4) Newsletter No. 100の発行（Web上で2022年3月公開）

### 4. 運營業務関連

1) 支部長連絡会の開催：2021年8月30日（月） Web会議システム

2) 理事会の開催：2021年8月30日（月） Web会議システム

3) 会長・副会長会議の開催：2022年1月下旬 Web会議システム

### 5. 学会機関誌

1) Language Education & Technology 第58号 2021年8月 J-STAGE で公開

2) Language Education & Technology 第59号

・投稿申し込み締切：2021年8月31日（火）

・応募論文提出締切：2021年11月30日（火）

・応募論文結果通知：2022年3月

### 7. 学会賞

2021年度学会賞選考委員会における受賞候補者の決定：2021年4月～6月

2021年度学会賞受賞者の理事会承認：2022年6月（メール稟議）

2021年度学会賞授賞式：2021年9月3日（金）総会において

2022年度学会賞候補者推薦締切：2022年3月末日

### 8. その他

1) 賛助会員に対するバナー広告の無料開放（8/30現在11社）

2) ホームページへの賛助会員動画掲載企画（賛助会員プレゼンテーション）

以上。

## 2021 年度 外国語教育メディア学会本部 予算案

2021 年 8 月 30 日

2021 年 4 月 1 日～2022 年 3 月 31 日

項 目	予 算 額	内 訳
賛助会費	1,250,000	賛助会費 @50,000 × 25 件
一般会費	1,164,000	前年度各支部会費収 入 × 0.18
雑収入	0	
収益 計 (①)	2,414,000	
繰越金 (②)	1,531,817	
法人化準備積立金 (③)	92,400	
収益 計 (①+②+③=④)	3,945,817	

費 目	決 算 額	内 訳
印刷費	359,700	機関誌 58 号(データ編集費 ¥252,000、J-STAGE 登録 ¥45,000、抜刷作成 ¥30,000)
通信費	50,000	切手、レターパックなど
ネットワーク関係費	700,000	本部サーバー管理費・業務委託費、ドメイン維持料・ 受付フォーム作成費・受付処理業務費など
旅費交通費	250,000	会長副会長会議旅費などの公務出張の交通費補助
会議費	25,000	会長副会長会議他
全国研究大会開催費	900,000	全国研究大会オンライン開催用のサイト開発(66 万 円)、全国研究大会参加申し込み機能修正
国際交流委員会費	20,000	
雑給	0	
事務用品費	50,000	文具・用紙・トナー・学会賞賞状作成費など
支払手数料	8,000	振込手数料
雑費	50,000	
費用 計 (④)	2,412,700	
次期繰越 (⑤)	1,533,117	
法人化準備積立金 (⑥)	92,400	
費用 計 (④+⑤+⑥)	3,945,817	

NEWSLETTER No. 100

発行日 2022年3月11日

発行所 外国語教育メディア学会 (LET)

会長 森田 彰